

# 佐賀大学における美術・工芸教室の変遷

—「特美」の設置から今日まで—

前村 晃

## 1. 佐賀大学の誕生と図画工作教室

昭和24年5月、佐賀大学は旧制佐賀高等学校、佐賀師範学校、佐賀女子師範学校、佐賀青年師範学校を母体として誕生した。発足当初は文理学部と教育学部のみを擁する小規模大学であった。しかし、小規模とはいえ、佐賀にも晴れて「国立大学」ができたのである。戦後、都道府県のすべてに最低でも「一国立大学」を設置したことは、まさに地方分権化の画期的な施策の一つであった。

都道府県すべてに国立大学ができたことで、高等教育の機会均等が担保され、貧しい家庭でも子弟を地元の大学に通わせることが可能となったし、また、各地の国立大学は地域の諸分野の発展に大きな刺激を与えることにもなった。もちろん、地方国立大学は、地域社会に人材を供給するだけでなく、大都市圏へも多数の人材を送り込み、わが国の学術、教育、芸術、スポーツ、産業等の飛躍的な発展を支え続けてきたのである。

佐賀大学の発足当時、教育学部図画工作教室には、図画研究室に、石本秀雄教授（西洋画）、筒井茂雄助教授（西洋画と図画教育法）、久富邦夫講師（西洋画）と文部事務官がおり、工作研究室に、城秀雄助教授（木工）、緒方敏雄助教授（彫塑）と文部技官がいた。

当時は、佐賀市城内にあった旧佐賀師範学校（現在の県立博物館・県立美術館の場所）の木造校舎を使用しており、本館の南側にあった校舎2階部分に図画関係の西洋画大教室、図画教官3名と事務官が同居する研究室、講義用教室、静物教室、素描大教室があった。

工作関係は、棟の一部分に地学教室が入っていた濠側の平屋木造校舎に、工作教官2名と技官の研究室、小部屋の染色教室、コンクリート床面の金工と窯芸兼用教室および木工教室があり、一部に学生のたまり場が確保されていた。工作関係の設備は、旧師範の木工関係があるのみで、その他はほとんど皆無に近い状態であった。数年後、濠に接する位置に彫塑教室が新設されたが、彫塑研究室は教室の一部を区切って使用していた。

第1期入学生は、中学校図画工作科（美術科）教員養成4年課程3名、同2年課程3名、小学校教員養成課程図画工作科専修1名、計7名であった。

なお、小川を境に、西側の女子師範学校の跡地には、附属中学校校舎および運動場と教育学部生用の筑紫野寮（現在の附属中学校運動場南側部分）が設けられ、一部濠側の棟が教官宿舎に転用されていた。また、後に濠側に2階建の女子学生寮（現在の附属中学校運動場南側部分）が建設されている。

学生寮には男子寮、女子寮共に美術系学生も数多く入寮した。女子寮は当時の普通のアパート風の建物であったが、男子寮は旧制師範学校の古い教室を仕切っただけで、冬には破れた窓ガラスから雪が吹き込むような状態にあった。しかし、部屋は20畳余の広さがあり、美術系学生が大きな作品を壁に立て掛けて制作するのには好都合であった。男子寮の美術系学生の住む一角はいわばアトリエ村の様相を呈していた。敗戦後、経済復興がいまだ不十分な時代には貧乏は当たり前で、美術系の寮生たちも老朽化した学寮でもそれほど気にすることなく制作にいそしみ、日夜、芸術論を熱っぽく戦わせたのである。

当初の一般教育の授業は大半が文理学部（本庄キャンパス）で実施されており、教育学部学生は、城内キャンパスと本庄キャンパスを徒歩や自転車で行き来した。

## 2. 特別教科（美術・工芸）教員養成課程の設置

戦後、教育制度が根本的に改革され、新制中学校（義務教育）と新制高等学校が全国各地に誕生したが、こうした新たな中等学校の教員養成については、十分な対応ができていたわけではなかった。そのため、文部省は、昭和27年、中学校、高等学校の教師供給の困難な教科について特別教科教員養成課程設置を決定するが、美術、工芸は、音楽、保健体育と共に当初からその対象となっていた。

昭和28年4月、佐賀大学に高等学校の美術、工芸教員養成を主な目的とする特別教科（美術・工芸）教員養成課程（学生定員30名）いわゆる通称「特美」が設置された。「特美」は、最終的には全国7大学（北海道教育大学・岩手大学・東京学芸大学・京都教育大学・岡山大学・高知大学・佐賀大学）に設置されることになるが、最初期から発足したのは、佐賀大学をはじめとする数校であり、その後、徐々に増やされていき、昭和42年4月、高知大学に特美が設置されてようやく全国7大学設置が完了した。

九州地区の特美の設置にあたっては、福岡学芸大学（現・福岡教育大学）と佐賀大学が激しい設置争いをしたが、石本秀雄らの懸命の努力と佐賀県の強力なバックアップがあって、佐賀大学に設置されることが決定したのである。

現在、特美の教育資料として美術・工芸教室が保有する美術、工芸作品は、当初は県の援助で購入されたものであるが、後には教室の予算で追加購入したものを含んでいる。主なものだけでも、岡田三郎助、海老原喜之助、藤島武二、斎藤与里、辻永、坂本善三、石本秀雄の油絵、中西利雄の水彩画、クトーのデッサン、海老原喜之助、脇田和、南桂子、木村忠太、岡本省吾、鈴木元治、ワイズバッシュ、アイズビリーの版画、古賀忠雄、安永良徳の彫刻、豊田勝秋の鋳金、滝一夫の窯芸作品がある。

教員養成系学部としては豊富な収蔵品をもつが、残念ながら学内には貴重な美術品を保管する場所がなく、佐賀県立美術館に預けている状況である。今回、佐賀大学美術館が建設され、そうした作品を学内で学生や市民に公開できることは喜ばしい限りである。

「特美」が設置されたことにより、教官定員5名（日本画1、構成プラス1、美術理論1、金属工芸1、窯芸1）が増え、学生定員が30名となった。学科目は日本画、西洋画、

彫塑、構成、美術理論、木材工芸、金属工芸、窯芸、美術・工芸科教育と整備された。また、非常勤講師も多彩な人々が招聘された。

各分野ごとの状況は次のとおりである（非常勤講師の肩書は基本的には非常勤講師当時のものとしているがごく一部は追記したものもある）。

### 3. 各分野の変遷

#### （1）日本画

藤田隆治講師（昭 32-40）は、戦前、ベルリンオリンピックの芸術部門で銅メダルを獲得し、戦後は毎日現代美術展委嘱となった。本学在任中に逝去している。

後任に京都画壇より下川千秋助教授／教授（昭 41-50）が着任した。下川は日展で特選を受賞している。また、千秋会を結成し、佐賀における日本画普及に努力した。

下川の後任には、岩永京吉助教授／教授（昭 50-57）が着任し、日展を舞台に活躍したが、地域の日本画振興にも努力し、大きな貢献をしている。

岩永の後任には、牛塚和男講師／助教授／教授／名誉教授（昭 57-平 23）が着任し、巧みな描写力を発揮して院展を中心に活躍し、美術界、教育界の後進の育成にも熱意をもってあたった。牛塚の後任には、ニューヨーク留学経験があり、博士の学位をもつ石崎誠和講師（平 23-現在）が着任している。

歴代非常勤講師は、松永冠山（日本画家）、別府道雄（高知大学）、橋本信（雅号勝弘安）、水谷興志（福岡教育大学）、大塚清吾（写真家）らがいる。

#### （2）西洋画

石本秀雄教授／名誉教授（昭 24-49）は、東光会の重鎮として活躍し、日展特選、審査員を経て日展参与となる。地方大学では初の大学美術教育学会理事長となり、西日本文化賞、勲三等旭日中綬章を受けている。

後任には、深川善次助教授／教授（昭 50-平 2）が着任している。深川は日展、日洋展で活躍し、附属小学校校長、附属中学校校長、佐賀県造形教育研究会会長として県下の美術教育にも大きく貢献している。

久富邦夫講師／助教授（昭 24-46）は在任中に退官したが、一水会会員賞を受けるなど、詩情豊かで構成的な風景画および人物画を得意としていた。若い頃、太宰治と交遊があり、太宰の小説のモデルともなっている。

後任に、深草廣平講師／助教授／教授（昭 46-平 13）が着任し、日展、日洋展で活躍後、フリーとなり個展を頻繁に開いて作家活動を展開した。セザンヌに傾倒した画風は高く評価されたが、在任中に急逝した。

後任には、不安定な時代に生きる人々の心理を巧みに描き出す、独自の画風を確立している二紀会委員の上瀧泰嗣教授（平 14-18）が着任した。上瀧は本学の卒業生で短期間ではあったが後進の育成に大きな功績を残している。上瀧の退職後、昭和会賞受賞者で新進気鋭の小木曾誠講師／准教授（平 18-現在）が着任し、制作、執筆、学生指導に熱意をも

ってあっている。

非常勤講師には、海老原喜之助（独立）、坂本善三（独立）、築山節生（二紀）、内山孝（日展・日洋会）、吉田西緝（独立）、竹内晟（独立）、井川惺亮（長崎大学）、陣内敦（長崎短期大学）、福岡奉彦（上越教育大学）、毛藤忠（三養基高校）、吉武研司（独立）、三塩佳晴（日本版画協会）らがいる。

### （３）彫刻

緒方敏雄助教授／教授／名誉教授（昭 26－46）は、日展特選など、具象彫刻界で活躍したが、広田弘毅像など大型の記念像だけでなく、優美瀟洒な裸婦像なども残している。

後任に、山本民二助教授／教授（昭 47－60）がいる。山本は、日展特選、審査員を経て、日展会員となっている。大学会館北庭園内にある旧制佐賀高等学校の学生像は山本民二の作品である。

山本の後任には、本学出身者でもある成富宏講師／助教授／教授／名誉教授（昭 60－平 18）が着任した。成富は、山本と同様、日展特選（２回）、審査員を経て、日展会員となっている。成富の退職後には、同じく本学出身の徳安和博講師／准教授（平 20－現在）が就任した。徳安は就任後早々に日展で特選を２回受賞している。

歴代非常勤講師は、佐賀県出身で芸術院会員となった古賀忠雄（彫刻家）、安永良徳（日展会員）、辻弘（兵庫教育大学）、小田部泰久（筑紫女学園大学）、鐘ヶ江寿（九州産業大学）、蛭田二郎（岡山大学・芸術院会員）、柴田善二（福岡教育大学）、堀尾博之（九州産業大学）、毛利陽出春（西日本短期大学）、平山史郎（大分芸術短期大学）、河原美比古（九州産業大学）、井手誠二郎（有田歴史民族資料館館長）らがいる。

### （４）構成

筒井茂雄助教授／教授／名誉教授（昭 24－51）は、東光会、日展で活躍していたが、学科再編成により、構成教育に変更となり、東京教育大学に内地留学し、九州のデザイン教育の草分けとなる。『新しいデザイン教育』など著書も多数あり、附属学校長を歴任するなど、美術教育界に大きな足跡を残した。勲三等旭日中綬章を受けている。

佐口七郎講師／助教授（昭 31－43）は、在任中、新設の九州産業大学芸術学部デザイン科教授に移り、同学部長、九州造形短大学長を歴任している。デザイン教育、コンピュータ・グラフィックスでは九州における草分けとなり、数多く研究書を書いている。佐賀大学の教え子を同大学に迎え、６名の教授を育てている。勲四等旭日小綬章を受けている。

佐口助教授の後任には、萩原孝三講師／助教授（昭 43－平 11）が着任した。萩原はデザインの教育と併行して、金属の線材と面材を巧みに用いた清新な作風のオブジェ等を作成し発表している。

筒井教授の後任には、宮木英幸助教授（昭 51－58）が着任するが、後、宮木は兵庫教育大学に転じて教授となり、さらに、九州芸術工科大学教授となった。モダンで新鮮な作風は斯界で高く評価されている。

萩原助教授の退官後、後任には、兵庫教育大学から荒木博申助教授／教授（平 11－現在）

が着任している。視覚伝達デザインとデザイン教育を担うが、特にタイポグラフィー、ダイアグラム、エディトリアルデザインを専門とし、優れた業績をあげている。

歴代非常勤講師には、日宣美創立会員、九州グラフィック界長老の中山文孝、高柳種行（佐賀高等学校）、西島伊三雄（二科）、増田正次郎（福岡女子大学）、檜枝泉秀（二科）、広井力（東京学芸大学）、水上喜行（大阪教育大学）、古川誠二（博多工業高校）、勝田宏（デザイナー）、河地知木（九州産業大学）、伊原久裕（九州芸術工科大学）、図学、製図に中村善一（九州産業大学）、宮木英幸（九州芸術工科大学）、畔野英雄（鳥栖工業高校）、阿部守（福岡教育大学）がいる。

### （５）美術理論

岸田勉助教授／教授（昭30-48）は、在任中、文部省の在外研究員として米国ボストンに留学した。留学先ではボストン美術館収蔵の日本画の整理と研究で大きな成果をあげている。在任中、新設の九州芸術工科大学教授として転任し、退官後は石橋美術館館長となるが、在職のまま他界している。勲三等旭日中綬章を受けている。

後任に、鎌倉近代美術館主任学芸員の副島三喜男助教授／教授（昭48-59）が着任した。副島は、教授在任中、福岡市立美術館副館長（後館長）に転任している。近代洋画研究の第一人者であり、高橋由一に関する研究者として高く評価されている。

後任には、神原正明講師／助教授（昭60-平3）が着任するが、後、神戸女学院大学に転任する。ポッシュ、オランダ版画の著書、論文が多く、佐賀大学を辞めた後、何冊もの大部の研究書を発行している。

後任には、小野康男講師（平3-7）が着任するが、横浜国立大学に転任し、教授、学部長となっている。小野は、リオタールやラカンなどを研究する芸術学の研究者であり、芸術に関する翻訳も多い。

後任には、本教室初の女性教官となった吉住磨子助教授／教授（平7-現在）が就任した。吉住は、着任後、カラバッジオ研究でイギリスの大学より博士の学位を得ている。

歴代非常勤講師には、塩塚瑞枝（福岡女子大学）、前川誠郎（東京大学・国立西洋美術館館長）、裾分一弘（学習院大学）、谷口鉄雄（九州大学・北九州美術館館長）、勝国興（同志社大学）、中江彬（大阪府立大学）、室井尚（横浜国立大学）、島本澣（京都精華大学）、建築概論に横田充（女子美術大学）などがいる。博物館学では、松本誠一（佐賀県立博物館係長）、尾形善郎（佐賀県立博物館副館長）、小宮睦之（佐賀県立博物館副館長）、宇治章（佐賀県立博物館・有田陶磁文化館学芸員）、立平進（長崎国際大学）、小坂智子（長崎国際大学）、木村法光（元宮内庁正倉院事務所保存課長・元京都芸術大学教授・同附属図書館長・同資料館長）、中尾智路（福岡市アジア美術館学芸員）がいる。

### （６）美術教育

美術教育の分野は、以前には、各教官が分担するかたちで守ってきた。美術教育のプロパーとして最初に着任したのは、永守基樹講師／助教授（昭58-平5）であるが、永守はデザイン分野の兼任でもあった。永守は県下の若手の美術教育者に大きな影響を与えてい

たが、和歌山大学に転任し、後、教授に昇格している。

深川教授（絵画）の後任は、大学院設置を前提として、美術教育のプロパーで埋めることになり、前村晃助教授／教授／名誉教授（平2-25）が着任した。前村は本学出身者でアメリカの美術教育事情に詳しいが、造形教育の延長線上でフレーベル主義の恩物保育導入期に関する研究とも取り組んでおり、平成23年に日本保育学会保育学文献賞を受賞している。前村の後任は平成25年度中には補充される予定である。

平成5年の大学院設置に関しては、どの教室も難航して、必ずしも明るい見通しはなかったが、美術・工芸教室では、幸い、わが国の美術教育界を代表する筑波大学の宮脇理教授（平5-7）を迎えることができ、他の教室に先んじて大学院設置の条件を満たすことになった。「宮脇教授、佐大赴任」は全国の美術教育者があっと驚く人事であった。宮脇教授は2年間の勤務であったが、密度の濃い活動を展開し、佐賀の美術教育に大きな足跡を残した。

後任には、筑波大学大学院博士課程を修了した栗山裕至講師／助教授／教授（平7-現在）が着任しており、美術と心理の関わりを教育の視点から研究している。

#### （7）金属工芸

豊田勝秋教授／名誉教授（昭29-38）は、特設美術科創設時に教授として迎えられた。豊田は、戦前、文展（日展）に工芸美術を設置するよう運動をした人物である。その後、同展で、特選を受賞し、審査員等をするなど、常に、第一線で華々しい活躍をしている。本学卒業生の産業界進出は、豊田勝秋教授の幅広い人脈に負うところが大きい。西日本文化賞、勲四等旭日中綬章を受けている。

後任に、本学卒業生の中牟田佳彰助手／講師／助教授／教授（昭38-平6）が着任し、手堅い鋳物作品を制作したが、中牟田は、イタリアに留学し、後、イタリア美術鋳物の専門書を2種出版しており、この分野の第一人者となった。また、福岡市東公園の日蓮上人像の鋳物技法に関する調査研究の著書を書き、恩師、豊田勝秋の評伝を書いたが、在任中、逝去している。後任は、大学院設置がらみで他教室に定員が割かれたためいまだに補充されていない。

歴代非常勤講師は、那賀清彦（産業工芸試験所）、江藤日出男（福岡教育大学）、戸津圭之助（東京芸術大学）、佐脇健一（大分大学）、田中一幸（東京芸術大学）、浜田民生（宮崎大学）、筒井知徳（太宰府高校）、宮田洋平（福岡教育大学）、菅野靖（長岡造形大学）らがいる。

#### （8）染織工芸

城秀雄助教授／教授／名誉教授（師-昭52）は、木材工芸と染色工芸を担当したが、染色工芸の技術の方は東京芸術大学内地留学により修得した。染色工芸で、日展特選、審査員を経て、日展会員となった。西日本文化賞、勲三等旭日中綬章を受けている。

後任に、小川泰彦助教授／教授（昭52-平3）が、染織工芸担当として着任するが、日展で特選を受賞し、審査員を経て、日展会員となり会員賞を受賞している。附属養護学校

校長、附属中学校校長を歴任し、教育者としても高く評価されている。

後任は、大学院設置がらみで不補充となったが、学部改組に際して、学部全体で数名の教官純増があり、金属工芸と染織工芸の不補充2の内、染織工芸1を取り戻すことになり、田中嘉生助教授／教授（平11－現在）が着任した。田中は、本学の卒業生である。日本新工芸展、日展で作品発表を続けており、着任後、日展工芸部門で特選を受賞している。

歴代非常勤講師には、鈴木照次（日本工芸会）、西島武司（京都市立芸術大学）、丸山陽子（染織家）、鈴木浩（染色家）、千代田憲子（愛媛大学）らがいる。

### **(9) 木材工芸**

木材工芸は、小学校教員養成課程40名増に際し各教室教官1名の純増があり、田中一幸講師／助教授（昭52－61）が着任するが、後、東京芸術大学に転任した。木材を中心に幅広い造形活動をし、鋳金、テラコッタ等も第一級の作品を発表している。

後任には、太田朋宏講師（昭62－平7）が着任するが、後、東京学芸大学に転任した。太田は、木材の素材をストレートに生かした造形表現をするが、コンピュータ・グラフィックスにも早くから関心を寄せ、研究を展開している。

太田の後任には、加賀谷健至講師／助教授（平7－20）が着任した。加賀谷の後任には、漆工の分野で国際的に活躍している、博士の学位をもつ井川健講師／准教授（平21－現在）が就任し、木工、漆工を指導している。

歴代非常勤講師には、大山繁三郎（九州産業大学）、川淵学（大川工業高校）、船倉鉦（産業工芸試験所九州支所）、山永耕平（九州産業大学）、坂本康四（大川木工試験場）、釜堀文孝（佐賀県工業技術センター）、菅生均（熊本大学）らがいる。

### **(10) 窯芸**

滝一夫助教授／教授（昭31－46）は、日展特選、審査員を経て、日展会員となるほか、チェコスロバキア国際陶芸展金賞受賞など国際的にも高く評価されていたが、在任中、他界している。

後任には、本学卒業生の宮尾正隆講師／助教授／教授／名誉教授（昭47－平16）が就任した。宮尾は日展を中心にスケールの大きな白磁の作品を発表し続けている。また、宮尾は美術・工芸教室の同窓会の維持、発展に大きな貢献を果たしている。

宮尾の後任には、オブジェの作品で国際的に活躍している田中右紀講師／准教授／教授（平17－現在）がいる。なお、田中は文科省から5年間総額2億5千万円の補助を受けた「ひと・もの作り唐津」プロジェクトのリーダーとして大きな成果をあげている。

歴代非常勤講師には、松尾仁（有田工業高校）、中里太郎右衛門（日展理事）、青木龍山（芸術院会員）、先代今泉今右衛門（人間国宝）、井上萬二（人間国宝）、坂本義弘（有田窯業大学校）、客員教授として、青木龍山（芸術院会員・文化勲章受章者）、酒井田柿右衛門（人間国宝）、当代今泉今右衛門がいる。

### **(11) 新課程関係**

新課程関係他の分野の歴代非常勤講師には、工業デザインの飯岡正麻（九州産業大学）、

環境造形の片野博（九州芸術工科大学）、毛利陽出春（西日本短期大学）、環境メディア論の坂下昌（デザイナー）、機能造形の高賀唯夫（九州芸術工科大学）、工芸計画の宇治章（有田陶磁文化館）らがいる。

## **(12) 事務部門**

佐賀大学の美術、工芸教室の発展を側面から支えてきた人々として歴代の事務官や技官の存在がある。過去に矢ヶ部功、井手清、古川功宗、小寺和子、宮崎智子、原ローの各氏がおり、現在の教室事務担当に非常勤職員の大鶴直子がいる。

## **4. 教育専攻科（美術、工芸）の設置**

昭和 35 年、教育学部に専攻科（入学定員 5 名）が設置された。大学院修士課程に準ずるコースであり、高校の普通 1 級免許状（美術、工芸）が取得できる、九州唯一の大学となった。入学者には、佐賀大学だけでなく、福岡教育大学、大分大学、熊本大学、鹿児島大学、宮崎大学の卒業生や、台湾からの留学生などもあった。専攻科では、より高度な教育が行われたことから、中学校、高等学校の教員だけでなく、短大、大学の教員となる者も少なくなかった。なお、専攻科は、大学院発足と同時に廃止された。

## **5. 美術、工芸棟、本庄キャンパスに移転統合**

昭和 36 年、本庄地区文理学部（旧制佐賀高等学校）運動場に、教育学部移転統合の先駆けとして美術、工芸棟が新築された。美術棟は、鉄骨ブロック 2 階建であったが、中庭を挟んで、平屋の工芸棟が並列して建てられていた。

美術棟は、1 階西側に彫塑室があり、階段を挟んで、次に染織教室、第二構成室、構成研究室、階段を挟んで、静物教室があった。同 2 階には、西側階段左側（西側）に油絵教室、右側に順に、油絵研究室、図書室（美術理論研究室兼用）、講義室があり、東側階段を挟んで右側（東側）に素描室が配置された。

工芸棟は、西端に窯場（窯芸用電気炉と金工用重油炉）ブロック建があり、西側より、専攻科研究室、工芸研究室、貴重品入倉庫、窯芸教室、金工教室、木工教室があった。

当時の美術棟と工芸棟の間の中庭は、造園の専門家・中村善一的设计によるもので、プラタナスが列植され、抽象彫刻が置かれ、芝生の上では学生が芸術論を戦わせたり、美術・工芸の学生集会が行われたり、時にはバーベキュー・パーティーの会場となったりした。中庭は美術と工芸を越え、学年を越えた交流の場であった。

## **6. 大学紛争**

昭和 42 年、筑紫野寮（教育学部）の電気・水道料値上げ問題に端を発し、全国の他の国立大学より約 1 年早く、佐賀大学で学園紛争が勃発した。この紛争には美術・工芸教室の学生も巻き込まれることになった。佐賀大学学生自治会は、学生大会でスト権を確立し、無期限スト闘争に入ったが、結局、夏休みを挟んで 116 日間に及ぶ長期のストライキとなり、その間、大学の教育機能はほとんどマヒ状態となった。講堂撤去反対籠城、前期期末



試験実力阻止、学長官舎包囲事件など大きな騒動が発生し、度々、機動隊が学内に導入されることになった。

また、同時期に、米軍の原子力空母エンタープライズ号の佐世保寄港反対闘争が発生し、全国の過激派学生が福岡、長崎、佐賀に集結した。佐賀大学自治会 150 名は佐世保橋で三派全学連と合流し、岡山大隊と混成部隊を結成して、佐世保橋の橋上で放水、ガス弾を浴びながら、機動隊と繰り返し、繰り返し激突している。佐大の美術・工芸教室の学生も団体レベルあるいは個人レベルで佐世保闘争にも参加している。

学生処分は数次にわたり、学生総数 2000 名足らずの大学で退学 25 名、無期停学 25 名の大量処分が発表された。その後も、処分が解かれた者は一部であり、大学に戻れなかった学生は多い。処分者の中には数名の美術、工芸の学生も含まれていた。教官と学生の信頼で成り立つべき教育の場に、双方の対立と不信感だけが渦巻いていたのだから、この時期は佐賀大学の最も不幸な時代であったといえるだろう。

## 7. 美術棟再建築

昭和 55 年、美術棟跡地に西側半分を鉄筋 3 階建の美術棟、東側半分を小学校課程 40 名増員分の校舎鉄筋 4 階建の新築工事に入った。美術棟 1 階入り口階段横に美術事務室、染織教室と講義室が西側に並び、トイレを挟んで彫塑研究室と彫塑教室が作られた。2 階西側に教官研究室 4 部屋があり、西側からデザイン教室、日本画教室、資料室が並び、3 階西側に教官研究室 4 部屋（1 部屋は院生演習室に使用）があり、教室は西側に油絵教室（一部版画室）、東側に素描室が設けられた。

## 8. 工芸棟新築移転

昭和 63 年、工芸棟は、美術棟より東側、旧不知火寮跡地で、音楽棟と技術棟（旧食堂改装）の間の空き地に新築移転した。コの字型で北側に窯芸研究室と窯芸教室、並んで窯場があり、東側に木工研究室と木工教室、並んで金工教室が作られた。美術・工芸教室発足当時に比べれば、設備も大幅に改善されたが、美術棟と工芸棟が離れ過ぎていて、一体感を生み出しにくいなど課題も残っている。

## 9. 総合文化課程造形文化コースの設置

平成元年、教育学部に教員養成課程とは別枠で新課程の総合文化課程が発足した。通称ゼロ免課程の誕生である。新課程設置検討委員会には、学部の 13 教室から各 1 名が参加したが、本教室からは中牟田（金工）が選出されている。本教室は、特美 30 名を擁していたが、改組と存続で意見が分かれた。当時の全国特美 7 校の態度も分かれており、北海道教育大学（札幌校）と東京学芸大学が改組、京都教育大学と岡山大学が存続、岩手大学と佐賀大学が様子見、高知大学が考えずという状況であった。

改組作業には数年を要した。教室では、最終的に、特美 30 名中 20 名を新課程に回し、

残り 10 名を特美として残すことになった。委員の心労は大きく中牟田は「平成元年の発足を目標に、逆算されて出てくる数々の問題と資料づくりにふりまわされる日々であった。物理的な作業に加えて、より深刻な問題は、教室の意見が賛否両論に分かれたまま、先行き不透明な改革、将来に結果を託す不安にあった」と述べている。中牟田教授は、改組と同時に病いに倒れ、他界した。

現在、全国に「特美」は存在しない。社会から「特美」の歴史的使命は終わったと判断されたのである。しかし、全国 7 大学に置かれた特美は、各地域の文化的拠点として、美術、工芸の継承と発展に大きな足跡を残したはずである。そのことに関する総括は、全国の「旧特美」が協同して、いまやっておかなければ特美の功績は永遠に埋もれたままになってしまうだろう。

新課程の総合文化課程は、社会文化コースと、造形文化コースに分かれていたが、造形文化コースでは美術理論、美術、工芸、環境造形の 4 選修を置いていた。しかし、平成 8 年に教育学部が文化教育学部へ改組されるに際し、総合文化課程は廃止された。創設から廃止決定まで僅か 7 年であった。

## 10. 大学院教育学研究科の設置

平成 5 年、教育学部に大学院が発足した。美術・工芸教室は大学院設置の先導的役割を發揮した。

美術・工芸教室では、深草教授が大学院設置の推進役、まとめ役を担ったが、平成元年、当時の教室教官全員で共著『造形教育・実践と展望』（佐賀新聞社）を発行したのもその一環であった。教育学研究科の場合、実技教官であっても、著書、論文がなければ、文部省の大学院担当教官の審査にパスすることは難しい、という情報が入っていたからである。

教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の発足当初の組織は次のように編成された。

- 美術教育 宮脇 理 前村 晃
- 美術理論 中牟田佳彰 小野康男
- 絵画 深草廣平 牛塚和男
- 彫塑 成富 宏
- デザイン 萩原孝三
- 工芸 宮尾正隆 太田朋宏 中牟田佳彰

(平成 5 年 4 月 1 日認可)

最初の大学院の入学式は、4 月 6 日、大学図書館で行われた。学校教育専攻 6 名、教科教育専攻（国語・数学・美術・体育・技術）17 名の定員で、1 回生は 26 名が入学した。美術では 6 名の入学者があり、最も数が多かったが、その後も留学生を含め、美術教育専修は受験者、入学者共に多く、ほぼ同じ傾向が続いている。

本教育学研究科は、設立当初から現職教員の積極的受け入れを表明していたが、初年度は佐賀県教育委員会から全体で7名の派遣があった。美術教育専修でも大学院設置以来(平成25年の時点までに)5名の現職教員が派遣されている。

## 11. 文化教育学部を設置

大学院設置が実現して、間を置くことなく、教育学部では学部の根本的改組に取り組むことになった。紆余曲折を経て、教育学部は文化教育学部となり、教員免許状取得を義務づける学校教育課程と、教員免許状取得を義務づけない国際文化課程、人間環境課程、美術・工芸課程の3課程が併存することになった。

美術・工芸教室は、この改組時が最も危機的状況にあった、といえる。文部省からは、中美(若干名)、特美(10名)、造形文化コース(20名)をすべて廃止し、就職状況などから見て全部で10名程度の学生定員が妥当だろう、という助言もあったのである。しかし、教室の卒業生は、教育界だけでなく、地域の産業界へも進出していたことから、教室発足以来の同窓生名簿に基づく就職先状況の資料を文部省に提出することで、美術・工芸課程30名が確保されることになったのである。

美術・工芸教室が教員養成から外れたのが、良かったのか、悪かったのか、現時点で即断することはできない。教員養成は国家的事業であることから今後も計画養成が行われるだろう。そのため大学の教員確保や予算の裏付けは得やすいものとなる。現に、本教室も、特美を離れた途端、大幅な予算削減に見舞われたのである。

いま、執行停止状態にあるが、教員養成系学部には再編統合問題もある。世の中には2県1学部とする案なども見え隠れしている。いわゆる「在り方懇」の影響である。しかし、政治家や官僚といえども、各地の納税者に、「無医大県」と同様、「無教員養成大県」を受け入れさせることができるかは疑問である。

## 12. 総合展と卒業制作展

学生の自主企画の最大のイベントが総合展である。昭和32年、九州で初めての本格的な美術館である石橋美術館が久留米市に開館した。その吹き抜けの1階空間に組立式のパネルを張り、佐大美術・工芸教室学生総動員の大展覧会が企画された。行動の中心は3年生で、上級生、下級生に呼びかけて実現した。以来今日まで、佐大特美のPRも兼ねて、会場を北九州の八幡美術館、熊本の鶴屋デパート、福岡県立美術館、長崎県立美術館等で総合展をし、後には地元佐賀県立美術館を利用して開催されることになった。その成果を教室側も認めて、会場費や運送費等の一部予算を途中から公費負担とした。教室の教育の一環として行われる行事であるが、学生の自主性を尊重する姿勢は現在も保たれている。

卒業制作展は、学生生活の総仕上げで、毎年、佐賀で開催されてきた。また、大学院発足後は修了制作展も同時に開催している。石本秀雄教授、豊田勝秋教授の功績を記念して、美術、工芸の最優秀作品に石本賞、豊田賞が与えられた時期もあるが、近年は、卒業は到

達点ではなく一通過点に過ぎないということで受賞制度は取りやめている。

### 13. 在学生・卒業生たちの活躍

本教室の在学生・卒業生は、特美の設置以来、地方展だけでなく全国規模の公募展やコンクールあるいは国際的なコンクール等で華々しい活動を展開している者が少なくない。

もちろん、本教室には、小学校教員養成課程の図工分野の専修生、中学校教員養成課程の美術科の専攻生も所属していたことから、卒業生は高等学校の美術教師となる者だけでなく、小学校や中学校の教師となり、小学校の図画工作科教育、中学校の美術科教育の世界で活躍する者も数多くいる。また、各地の国公立の短大、大学等に教員として採用された者もいるし、織物業、染色業、窯業、木材加工業、マスコミや企業のデザイン部門など、教育以外の分野に進出した者もいる。

こうした伝統は、大学院設置後も良く継承されていて、院生で日展、独立展、二紀展など全国規模の展覧会に入選、入賞する者は珍しくない。特に、数年前には、院生が昭和会賞（絵画）と優秀賞（彫刻）を同時受賞して大きな話題となったことは記憶に新しいところである。なお、この時の優秀賞（彫刻）受賞者は大学院修了後の20代半ばで日展彫刻部門の特選を受賞している。

また、数は多くはないが、美術館の学芸員として活躍したり、美術教育のプロパーとして短大、大学等の教員に採用される卒業生も出てくるようになった。

大学教育の成果は、在学生や卒業生の活動の質と量で測れると思われるが、本教室は小さい組織でありながらも、教室設置の目的を十二分に果たしているといえるかと思う。

### 14. 佐賀大学研究叢書『美のからくり—美術・工芸の舞台裏—』の発行

平成23年12月、美術・工芸教室では、関係教員11名で佐賀大学研究叢書『美のからくり—美術・工芸の舞台裏—』を発行した。本書は中学生、高校生あるいは一般の人々で美術、工芸の世界を知りたいという人向けに書かれたものであるが、専門家でも自分のジャンル以外は良く知らないという場合も多いようで、一般の人々だけでなく、専門家からも強い関心が寄せられる結果となった。大学の小さな一教室が総出動で一書を世に問うということはできそうでなかなかできることではない。本書の発行は本教室がこうした出版を可能とする実力を備えていることを証明するものでもある。

### 15. 本教室と海外および国内の大学間交流

本教室が中心となって交流をしている大学として、海外では中国の首都師範大学、韓国の江南大学校があり、国内では早稲田大学がある。

佐賀大学と首都師範大学との大学間学術研究交流協定は、1999年4月12日、先方の学長一行が来日して、佐賀大学において締結された。この交流協定は、北京からの留学生・王国偉君が仲介者となり、故・深草廣平教授が中心者となって推進した。先方からは、各

年毎に、李福順教授をはじめ数名の教員に非常勤講師として来日してもらい、こちらからは、各年毎に、故・深草廣平（洋画）、宮尾正隆（窯芸）、牛塚和男（日本画）、前村晃（美術教育）、荒木博申（デザイン）らが首都師範大学に招聘され、講義や講演をした。1999年12月には、佐賀県立美術館画廊および研修室において「首都師範大学美術科教師中国画作品展」が催され、首都師範大学の教師12名の47点の作品が展示された。残念ながら最近では日本側の経済的事情もあってこうした交流は停滞している。また、以前には、双方の在籍学生、卒業生が互いに留学するということがあったが、現在はそうした交流も途絶えたままである。

佐賀大学文化教育学部と韓国の江南大学校第Ⅲ大学との学術交流協定は、2003年9月22日、締結された。その下地としては、佐賀の美術、工芸界と韓国の美術、工芸界との交流があったが、直接的なきっかけは江南大学校の崔浩天教授が客員研究員として佐賀大学のデザイン教室に1年間滞在したことにより、荒木博申（デザイン）と崔浩天教授が中心となって推進したことで実現した。現在は、双方のデザイン、工芸の分野を中心として学生、教員の交流を継続している。双方のデザイン専攻の学生が共同してカレンダーを制作し、両国で配布・発売するなどの実績もあげている。

2007年7月20日、佐賀大学と早稲田大学は包括協定を結んだが、長谷川照学長（当時）から前村晃（美術教育）に「包括協定の下、美術でも交流ができるのではないか」という示唆があり、前村が早稲田大学と相談した結果、2010年1月、佐賀大学の美術・工芸教室と早稲田大学の基幹理工学部表現工学科との交流を開始することとなった。こちらからはデジタル表現関係の教員諸氏が先方を訪問したり、先方からは藪野健教授（現・芸術院会員）が2度佐賀大学を訪問し、学生に制作上のアドバイスや講演をしてくれている。また、藪野健教授と吉住磨子（美術史）、栗山裕至（美術教育）、前村晃（美術教育）とで鑑賞コラボを実践し学会等で発表している。佐賀大学と早稲田大学の学生および教員の交流をより盛んにするのは今後の課題であろう。

## 16. 佐賀大学美術館建設の意義

佛淵孝夫学長時代になって、佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年を記念する一大事業として、正門付近整備と美術館建設構想が打ち出され、佐賀大学美術館は、平成25年1月着工され、同年10月1日、大学統合の記念日に開館の運びとなった。

芸術の専門大学ではない一国立大学法人が美術館を建設するということが異例中の異例であるがだからこそ意味があるともいえる。他大学と同じことばかりをやっても大学間競争の時代にあっては無意味である。そういう点からすれば佐賀大学の美術館建設は大学に特色を持たせる絶妙のアイデアであったといえよう。

佐賀大学美術館は、佐賀にゆかりの美術、工芸の作品をはじめ、旧制佐賀高校、佐賀師範学校などの前身校や、佐賀大学、佐賀医科大学の歴史資料の収集・保存・展示をしたり、大学ならではの特別企画展、在籍学生、卒業生、大学教員の個展、グループ展等を催したり

することになるだろう。また、芸術に関する講演会、実技研修会、ワークショップ等を実施して、子ども達を含む地域住民に開かれた美術館づくりを目指すべきであろう。それを担う学部生、院生、教員、学芸員といった人的資源は豊富にある。そこが普通の美術館とは異なる大学の美術館の強みともなる。

佐賀大学美術館は、学生や教員のミニコンサートや舞踊など多種多様な表現活動の発表の場ともなるだろう。美術館には飲食のできるスペースや佐賀大学グッズを売るコーナーも設けられる予定である。学生や教員や市民が美を語り、文化を語り、人生を語るサロンともなればすてきである。佐賀大学の美術館には大学の「さまざまな可能性を開く場」となることを期待したいものである。

## 17. 教室の今後の課題と展望

これからも、学部と共に、美術・工芸教室は大きな変革の波を被り続けることが予測される。目先的には、教員養成系学部の再編統合がどうなるかが大きな懸案であるが、教室のスタッフの努力と、同窓生の協力と、地域のバックアップを得れば何とか乗り切っているのではないだろうか。もちろん、「日本丸」自体がどこへ行こうとしているのか判然としない現状では鮮明な見通しをもつことは容易ではない。

しかし、美術・工芸教室の教員、学生、卒業生が今後とも研鑽を重ね、輝かしい業績を社会に示し続けるならば、本教室は、わが国の西南の一角で小粒ながらもキラリと光る、芸術の創造と教育の一拠点として存続し得るであろう。

(佐賀大学名誉教授・西九州大学教授)

### 〔参考文献〕

- (1) 中牟田佳彰「佐賀大学教育学部美術・工芸科（特設美術科）小史」、『美術・工藝教育學』、第1号、佐賀大学美術・工芸科教室、1993年
- (2) 中牟田佳彰・前村晃補記「佐賀大学教育学部美術・工芸教室小史—特設美術科創設より美術・課程まで—」、『50周年記念誌 佐賀大学美術・工芸教室50年』、佐賀大学、平成15年

※古い記録は故・中牟田佳彰教授の資料に頼らざるを得なかったが、中牟田教授が(1)を執筆後早くも約20年の月日が過ぎ(この時も病氣療養中の中牟田教授から前村に加筆、修正等が任されていたが)、(2)の前村補記後も10年近くが経って、加筆、修正をしなければならない部分も相当量になったので、本稿は敢えて前村晃の文責で執筆することとした。今後も、教室の歴史を加筆、修正する機会があるはずであるが、筆者(前村)も退職したので、今回は、別の人を書くことになるだろう。